

人と魚と海のネットワーク
香川県漁連ホームページ
http://www.jfnet.ne.jp/kagyoren/
E-mail:gyoren@ns.kagawa-
gyoren.or.jp



JF
J F 香川漁連

高松市北浜町 8 - 25
TEL 087-825-0350
FAX 087-851-0699

平成 14 年度第 2 回 漁業技術研修会開催

平成 14 年度第 2 回漁業技術研修会（主催：香川県、香川県漁連、香川県信漁連、（社）香川県水産振興協会）が、3 月 20 日午後 1 時から漁連会館 6 階大会議室で、県下の魚類養殖業者、漁協職員、その他関係者約 60 名が参加、講師に三重大学教授長谷川健二氏を招き開催された。「水産物の流通実態と需要動向について」をテーマに講演があり、その後意見交換が行われた。



熱心に講演を聴く漁業者

講演は、はじめに、水産物の自然志向は強く、食品の安全・安心に対する消費者の目は厳しくなっている。これからの水産業は、高齢化社会に対応し、安心・安全を得ることで、マーケットは開けていく。今がその通過点であるとの話があった。

近年の養殖ブリの動向は、平成 3 年バブル崩壊により消費者の財布は堅く 3 ~ 4 年の周期で繰り返される価格の“谷”がしだいに深くなり、平成 7 年にはブリの価格が暴落した。産地の養殖ブリ価格は生産コスト割れを引き起こし、多くの養殖業者の経営を危機に陥れた。

また、市場での取扱い動向は、養殖ブリに比較し、日持ちが良く、色落ちしないという流通段階のメリットをかね備えた養殖カンパチへ重心が移行しつつある。今日、ラウンド形態の養殖ブリ（養殖ハマチ）取扱量の減少と養殖カンパチの増加が顕著となってきている。このように大都市市場での養殖ブリの取扱量の減少とは裏腹に養殖カンパチの取り扱いの急

増が全国的に見られる。平成 7 年の価格暴落によって、刺身商材としての養殖カンパチにシフトしつつあるのも今日の傾向である。このように養殖ブリを巡る市場流通は縮小供給という環境の変化の中で出荷業者間の新しい競争の局面に入りつつある。

養殖ブリの市場外流通は、スーパー等の量販店の対応によって産地と直に取引するケースが増加しつつあると言われている。スーパーでのアイテムとしては、これまで切り身が主体であり、刺身は主たるものではなかったが、近年、家庭内消費における刺身需要の増大とともにフィレーなどの加工品への仕入れが増加傾向にある。

仕入れの形態としては、店舗独自仕入れを行っているスーパーでは、最近、店舗の自主性を高め、ロス率を低く押さえるためにできる限り「独立採算制」により、経営効率を高めるという方向に転換したものである。こうしたスーパーなどのような業者を除いて、通常、スーパーは本部一括仕入れにより、出荷業者と直に仕入れを行い、必要な時期に必要なアイテムの量を確保することが可能であり、同時に大量仕入れによるコスト削減をはかることが出来るというメリットが存在する。養殖ブリの供給量は天然種苗に依存しているため、資源変動に伴う変化を受けやすく、価格の変動も大きい。こうしたことから流通業者も“できれば敬遠したい傾向”が生じてくる。長期不況による消費の停滞と、刺身市場をはじめとする養殖魚類市場における供給の全体としての増大である。こうした供給量全体の増大は個々の養殖魚類商品間の競争を強め、新旧商品の交替が起きるのである。“バブル期”に拡大した活魚を始めとした需要も現在頭打ちの状態であり、新規の刺身商材による市場創造も困難である。

養殖マダイの供給動向は、今日、生産過剰・価格低迷の状況にある。このような原因は、基本的には日本経済のバブル経済崩壊以降のいわゆる“消費不況”による購入量の低下と低価格な輸入魚の増加による影響と考えられるが、その他にもマダイ養殖そのものにも構造的な問題が存在する。第一には種苗生産技術の確立によるものであろう。ブリ養殖の場合は、天然種苗による生産を行うため、種苗の資源量によって、ある程度供給が規制されている。それに対して、人工種苗の場合は、供給規制がないため放養尾数が年々増加している。このように種苗生産

技術の確立は、養殖マダイの供給過剰を構造的なものにした。第二には、餌料効率の高まり、歩留まり率の向上など、生産技術の進歩によって大量養殖によるコスト削減が実現されたことによるものである。各地の地域特性に対応した養殖マダイの商品形態・サイズなどに違いが生じており、養殖マダイにおける市場需要の地域的多様性が生まれてきた。参加者からは、「香川県ではハマチ・カンパチ養殖には不利な漁場条件である一方で、香川県漁連という販売力を持っており、この地域特性を生かした、今後の方策について」また「天然・養殖魚の今後の需要動向について」などの質疑があり、午後 2 時 45 分に閉会した。

「西詫間漁業協同組合」が正式に発足

平成 15 年 4 月 1 日、三崎漁協、大浜漁協の合併が認可され、「西詫間漁業協同組合」が発足しました。

同日午前 10 時、新しい「西詫間漁業協同組合」の看板が掲げられた同漁協事務所において、初めての理事会、監事会が開催され、新体制について協議された結果、理事の互選で新組合長に亀野修氏が就任されました。また、三崎漁協でも玄関上に真新しい「西詫間漁業協同組合三崎支所」の看板が掲げられ、支所として再スタートが切られています。

なお、合併登記の申請も直ちになされ、名実共に新しい漁協が発足しています。

この合併は、平成 14 年 10 月 22 日に合併協議会を設置して以来僅か 6 ヶ月足らずの短期間で行われましたが、これまで漁協の健全な運営に努められ、合併という大事業を成し遂げられた両組合長、役員及び組合員の各位の皆さんの、大いなる理解と実行力にあらためて深く敬意を表します。

新生「西詫間漁協」が、地域漁業の発展に貢献され、将来の更なる広域合併に向け、益々その基盤の強化に努められることを祈念しつつ、今後においても特段の支援を行って行きます。

なお、この合併により県下漁協数は、平成 8 年まで 57 漁協あったものが、42 漁協となっています。

また、西詫間漁協と同じ詫間町内にある詫間漁協と箱浦漁協は現在合併に向けて財務内容の最終的な調整が鋭意進められていますが、当初予定されていた平成 15 年 4 月 1 日の合併は見送られ、合併予定日を平成 15 年 7 月 1 日とすることとなりました。両漁協とも関係者の努力が実り晴れて合併が成就されますよう、県や地元町ともどもより一層の支援・指導をしていきます。(組織強化推進室)

平成 14 年度 香川県水産研究発表会開催される

平成 15 年 3 月 11 日 13 時より、漁連会館 6 階大会議室において香川県水産試験場主催の平成 14 年度香川県水産研究発表会が開催され、漁業関係者ら約 60 人が参集し、タケノコメバルの養殖試験等について熱心な質疑が行われ、盛会裡に終了した。



水産研究発表会

発表内容の概要は以下のとおり。

『タケノコメバルの生態』 棚野 元秀

タケノコメバルは、日本、朝鮮半島を中心に分布する大型のメバル類であり、瀬戸内海では昭和 30 年代までかなりの数が生息していたが、昭和 40 年代以降急激に減少したと考えられ、現在は漁業者においても漁獲することは稀な状況である。

その幻の魚となっているタケノコメバルの生殖は卵胎生であり、産仔は 12 ~ 1 月に行われる。生まれて半年近くは浮遊生活をしているが、6 月頃には 4 cm 前後に成長し、流れ藻に随伴する稚魚が見られるようになる。浮遊生活の間はコペポダ等のプランクトン、着底後は海藻(草)上で生息するヨコエビ等の動物、その後は魚類等の大型動物を食する。

これまでに研究報告等で発表されている知見、及び親魚の収集や飼育の過程での知見を基にタケノコメバルの生態について発表した。

『サワラの生態調査及び放流サワラの追跡調査』

竹森 弘征

瀬戸内海群のサワラについては、現在資源回復計画対象種となっており、その措置として漁獲規制や種苗放流(標識放流)等が実施されている。生態調査等で得られた生物情報や標識放流魚の再捕状況を基に、サワラの資源状況の評価と漁況予測の検討を

行い、サワラの資源管理推進に役立てるため、放流魚の追跡調査について報告。

『燧灘東部海域における貧酸素水塊の形成要因について』 山田 達夫

燧灘東部海域は、汚濁が著しく進行した 1960 年代の高度経済成長期以降、様々の汚濁負荷削減措置が試されてきたため、COD 負荷量は 1970 年代後半には 10 分の 1 まで激減した。しかしながら、貧酸素水塊の形成、発達機構は未だ不明瞭な点が多く、夏期の DO 濃度の年変動機構は明らかになっていない。貧酸素水塊の形成要因の解明に資することを目的に本調査は、水温、塩分、DO 濃度等の環境調査結果について報告。

『海産養殖魚類におけるマリンビルナウイルスの出現』 一色 正・長野 泰三

マリンビルナウイルス (MABV) は各種の海産魚介類に感染する宿主域の広いウイルスであるが、海洋環境におけるその分布や感染環については、十分に明らかにされていない。香川県下の各種海産養殖魚類における MABV 感染の実態を解明するため香川県下で養殖されていた 23 種の海面魚類の脾臓 (1,291 検体) を採取し、培養細胞による MABV 遺伝子の検出等を行った結果について報告。

『世界の牡蠣養殖事情 アメリカ編：主にチェサピーク湾の動向』 山本 義久

隆盛を誇ったチェサピーク湾での牡蠣資源の枯渇の主な要因としては、乱獲、その後の環境汚染と疾病 (寄生虫) が挙げられ、1983 年以降牡蠣資源は激減した。この対策として資源回復計画が発足し、合理的な計画に則り綿密な環境調査と母貝育成場所のオイスターリーフの設置、漁場整備、漁獲規制、ふ化場での稚貝生産及び種苗放流等を展開し、牡蠣資源は若干回復の兆しがみられている。チェサピーク湾の語源はネイティブアメリカンの言葉で、「豊かな貝類を育む偉大なる水界」という。この言葉が持つ意味をチェサピーク湾の教訓として、瀬戸内海の資源回復に反映できればと語った。

水揚げしたのは、タイ網漁が解禁となって 7 日目で、昨年に続いて同町仁尾の漁業藤田勝太郎さん (56 歳) 3 月 21 日午後 4 時ごろ、鳶島沖約 4 キロに仕掛けたタイ網網にかかっていた。初ダイは、体長 68 ㍉、重さ 3.7 ㍏競りでは町内のスーパーが競り落とした。

タイは、24 日老人福祉施設 [にお荘] に旬の味覚を楽しんでもらおうと刺身に調理し寄贈した。入所者ら約 80 人が春の味を満喫し、お年寄りたちは「身がプリプリでおいしい」「縁起がいいですね」と顔をほころばせながら、初ダイの刺身や寿司を味わった。

漁協では「ご祝儀相場とはいえ、景気のいい値段、これからの水揚げに期待したい」と話している。

また、大内町三本松の東讃漁協では、同町の漁業中川邦俊さん (49 歳) が 3 月 23 日小磯沖約 5 ㍉の定置網で体長 55 ㍉、重さ 2.5 ㍏のタイがかかっており、さぬき市大川町の鮮魚商が 12 万円のご祝儀相場で競り落とした。



水揚げされた初ダイ

主な行事予定 (4/1 ~ 4/30)

- 4 月 1 日 (火) 新入職員入会式
漁連監事会
- 7 日 (月) 四国四県推進本部長会議 (松山市)
四国四県漁連・信漁連会長会議 (松山市)
- 8 日 (火) 香川県漁業無線組合理事会
- 9 日 (水) 香川県漁協職員協議会委員会
- 14 日 (月) 漁連女子職員研修
- 21 日 (月) 漁連女子職員研修

初ダイ

景気づけにご祝儀相場

春の訪れを告げる初ダイが、仁尾町で 3 月 22 日早朝水揚げされ、仁尾町漁協の競りにかけられた。ご祝儀相場は過去 10 年で最高額の 18 万円だった。